



私が生きている理由

八木 慎太郎
高知大学2年

私は、現在、高知大学で文学や言語、映画に関する勉強をしながら教員を目指して教職免許取得のための講義も受講しています。

人生の転機は、今から**6**年前に訪れました。高校**1**年の**3**学期をむかえたある日の朝、突然、自分の体がベッドから起き上がらなくなったのです。

当時は、自分でも何が起こったのかまったくわからず病院を転々となりました。最後に私に下された診断は、「起立性調節障害」という病名でした。

起立性調節障害は、自律神経の異常によって、眩暈や立ちくらみなどの症状が激しくなる疾患です。立ち上がる時に血圧が低下するという症状もあり、私の場合、ひどいときには最高血圧が**70**ほどしかないときもありました。

そんな重い症状から学校に行けなくなった私は、だんだん家に閉じこもるようになり、家族との会話も交わせない、恐怖心で友人のメールにも返信できない、さらには、外の世界とのつながりを自ら遮断するようになりました。

その後、普通科高校から通信制高校に編入し、周囲の人たちから体調に対して多大な配慮を受けながら**18**歳で高校を卒業しました。ですが、体調的には大学で勉強できるような状況ではなく、結局、**2**年にわたって療養に専念することになりました。

その間は、何だか宙ぶらりんのような自分の現状に焦りを感じる日々でした。

「今の状態がずっと続くわけではない、いつかきっと良くなるから、今はゆっくり休みなさい」と、家族や周りの大人は温かい言葉をかけてくれます。でも、両親は毎日仕事をしているし、友人は毎日学校に通っています。私だけ何もしていないのです。それだけで、私は居心地の悪さを感じていました。



高知大学朝倉キャンパス

その居心地の悪さは、だんだん社会に対する居心地の悪さにつながり、やがて、この世の中に対する居心地の悪さへと大きくなっていきました。

その中で生まれた「自分自身に生きる価値がない」という思いは、知らないうちに「価値がないとみなしたものは大切にする必要はない」という思いこみにすりかわり、心を覆いつくしていきました。

そして、私は一度、私自身を諦めました。

ときどき、「自分の命をつなぎとめたものは何だったのだろうか」と思うことがあります。それは、私のことを誰よりも心配してくれた家族や、信じて待ってくれていた友人たちの存在でした。彼らが私に、「私は価値がある」ということを教えてくれたのです。



The Godfather 1972年公開

病気による数々のめぐり合わせがなければ、私は高知に来ることもなかったし、高知でのたくさんの出会いや KOCHI IYEO の活動に参加することもなかったと思います。

これからも、自分と異なる背景や考え方を持つ人との出会いを大切に自分の視野を広げていきたいし、幼いころからの夢である

教員になっても、「多くの経験を経た自分だからこそ子供たちに伝えられるものがある」と思っています。

話は戻りますが、病気で体が動かなくなり、人と会うことができなくなってからは、よく映画を見るようになりました。現実逃避から見始めた映画でしたが、今では、映画が自分の現実に影響を及ぼしています。映画を通して多くの人と友人になることができました。また、大学では映画についての講義を受講し、勉強している自分がいます。

病気が私の人間関係を断絶させ、今、映画好きの私がいるという事実があります。ですが、「この経験があつてよかった」、「この経験が自分を強くした」という思いを言葉に出したいとは思っていません。

私にとって、これは経験などというものではなく、私そのものだからです。

「自己肯定感」という言葉がありますが、私が一番だけ言えることは、「私は、私に生まれてきて、そして、これまで私を生きてきて本当によかった」ということです。なので、これからもみなさんとともに生きていきたいと思っています。

KOCHI IYEO HP



2024年7月18日発行
発行者
高知県青年国際交流機構
(KOCHI IYEO)
会長 前田正也

☎ 090-9552-0022

✉ xiwang@yacht.ocn.ne.jp